

「光は闇の中に輝く」

(ヨハネ1:1-18)

挽地茂男

2018.12.9. 日本基督教団千歳丘教会



クリスマスが近づくと、街の中はイルミネーションで、光の街となります。しかも、街と街の間でイルミネーションの豪華さを競い合っている観があります。ある旅行雑誌(「るるぶ」)に全国の人気イルミネーション・ランキングというのが載っておりまして、ベストテンの内の2つが東京でありまして〔東京ドイツ村というのが10位にランキングされていますが、これは千葉県。東京ディズニーランド、という場合と同じ〕、しかも1位と2位なんです。さすがに東京です。〔地方に比べて人口が多いですから当然かもしれません。〕1位は、丸の内イルミネーション2018(東京都／千

代田区)で、2位はミッドタウン・クリスマス 2018(東京都／港区)です。1位の「丸の内イルミネーション2018」は、丸の内エリアの冬の風物詩として街を彩る毎年恒例のイベントです。ブランドショップが並ぶ約1.2kmの丸の内仲通りを中心に、200本を超える街路樹が、LED約100万球を使った丸の内オリジナルカラー「シャパンゴールド」で彩られます。まるで日本の平和と豊かさを象徴しているかの様です。生前(1982, 82, 84年)に来日したマザーテレサ(Mother Teresa, 1910年8月26日- 1997年9月5日)はこういう言葉を残しています。「日本に来て繁栄ぶりに驚きました。物質的に本当に豊かな国です。しかし町を歩いて気づきましたが、日本人の多くは弱い人、貧しい人に無関心です。／物質的に貧しい人は他の貧しい人を助けます。精神的に大変豊か



日本に来て繁栄ぶりに驚きました。
物質的に本当に豊かな国です。
しかし町を歩いて気づきましたが、
日本人の多くは弱い人、貧しい人に無関心です。

物質的に貧しい人は他の貧しい人を助けます。
精神的には大変豊かな人々です。
物質的に豊かな人の多くは他人に無関心です。
精神的に貧しい人々です。

愛の反対は憎しみと思うかもしれませんが、
ほんとうは無関心。
憎む対象にすらならない無関心なのです。

マザーテレサ

な人たちです。物質的に豊かな人の多くは他人に無関心です。精神的に貧しい人たちです。／愛の反対は憎しみと思うかもしれませんが、本当は無関心。憎む対象にすらならない無関心なのです。」〔ちなみに大規模なイルミネーションはまだ行われていませんし、それにかかる電気代はそれほど高額ではありません。「丸の内イルミネーション」の場合、1日6時間点灯で9,720円(2015年)ですから、LEDの節電効果は絶大です。〕

男子の会の例会では箴言を学んでいます。時々マザーテレサの言葉を紹介します。こんな言葉です。「**思い**(/思考 your thoughts)に**気**をつけなさい、それはいつか**言葉**になるから。言葉に**気**をつけなさい、それはいつか**行動**になるから。行動に**気**をつけなさい、それはいつか**習慣**になるから。習慣に**気**をつけなさい、それはいつか**性格**になるから。性格に**気**をつけ



なさい、それはいつか**運命**になるから。」思いは究極的には運命につながります。

それはさておき、わたしたちは先週から、ヨハネによる福音書の冒頭に記された「ロゴス賛歌」(1:1-18)を学び始めました。「**初めに言があった。**」これを「**ハジマリニ カシコイモノゴザル**」と翻訳したのは、現存する最古の日本語聖書として知られるギュツラフ訳の「ヨハネによる福音書」でした。そこでは「言」「ロゴス」が「**カシコイモノ**」と翻訳されています。(「**カシコイモノ**」とは知恵と理解してもよいでしょう。)

また気仙語訳のヨハネ福音書では「初(は**す**)めに在ったの**ア**神様の**思い**だった」と訳して、「言」「ロゴス」を「**思い**」と翻訳しています。旧約文書の「箴言」や「知恵の書」を参照すると、「言」がすべてを創り、「知恵」が世界と人間の創造に参加します。少し無理を承知でのマザーテレサの言葉にかぶせると、世界や人間や時間(歴史)がまだ存在しない「初め」に、



神の知恵を内に秘めた神の思いが、神の言として発動し、世界を創る創造行為へと行動を起こしていったのです。そして神の思いは、長い歴史を通過して一つの重大な運命にたどり着きます〔後述〕。

先週は「賛歌 1」(v. 1-5)の途中まで学びました。「賛歌 1」で最も重要なテーマは、神の「言による創造」のテーマです。神は「初め」に、「言」によって世界を創造



されました。神が「言」を発すると、そのように世界が成

る。神が「**光よ。あれ**」と言われると、**光があった**。神さまの言葉の通りに、光が創造される。「あれと言われると…あった。」聖書の創造物語の重要な「言による創造」のテーマです。このテーマがヨハネによる福音書 1 章 3 節で再確認されます。「**万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった**」。3 節で「言による創造」という創世記のテーマを再確認しそれを重要なテーマとして引き継ぐと、次に新しく、「命」と「光」

のテーマが加わります。今日はこれらのテーマが主役です。4 節。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。(1:4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, καὶ ἡ ζωὴ ἦν τὸ φῶς τῶν ἀνθρώπων) 4 節の表現では、言と命と光がリレーをするように緊密に結びついています。

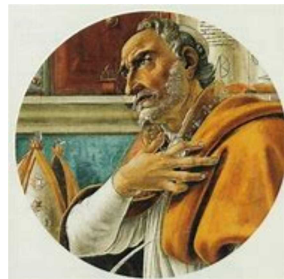
聖書では命を表すのにいくつかの言があります。そのうちに二つをご紹介します。それは永眠者記念礼拝の時にもよくお話しするのですが、「ゾーエー」と呼ばれる命と、「ビオス」と呼ばれる命です。「ビオス」とはバイオロジー(生物学)とかバイオテクノロジー(生化学)で使われる「生物学的・自然的生命」肉体の命のことです。もう一方の「ゾーエー」は人格的な生命のことです。

ζωή (ゾーエー＝人格的生命)

βίος (ビオス＝自然的生命)

人間は、体は生物として生きていても、心は人格として死んでいるということがあるのです。「生ける屍」という言葉がありますが、「生きながら死んでいる」状態というものはあるのです。アウグスティヌ

スは『告白』のなかでこう書いています。「まことに、主よ、私はた



だこれだけのことをいいたい。自分はどこからこの世にやってきたのか知らないのです。

それは『死せる生に』というべきか、『生ける死に』というべきか、これも知りません」（アウグスティヌス『告白』1.6.7）神を知らなかったとき、アウグスティヌスは、自分がどこからやってきて、何のために生きているのか分からない。そして生きている意味もなく生きているのは「死せる生」と言っているのか、「生ける死」と言うべきかそれも分からない、と語るのです。ハイデガーという哲学者はこのよう



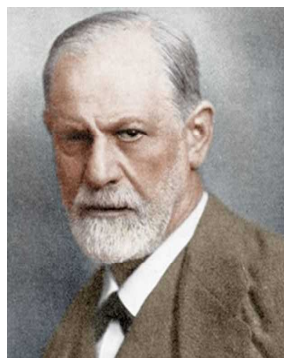
な人間存在を「投げ出された存在」と呼んだのです。何のためにこの世界に生きているのか分からない。気づいたらわたし

でした。こんな顔で、こんな体つきで、こんな性格で、こんな時代に、こんな人々の間で生きていた。気づいたら生きていた。どこから何のためにやって来たのかわ

からない。こんなわたしに「人生の目的」など聞いても無駄と聞きたくないのです。

聞いても無駄、「人生の目的」などわからない、という答えは、多くの知識人の答えでもあります。夏目漱石はこう言いました。「私はこの世に生れた以上何かしなければならん、とって何をして好いか少しも見当が付かない」（『私の個人主義』）。芥川龍之介は自殺直前の自伝的小説の中で、長男の誕生をこう語ります。「なんのためにこいつも生まれて来たのだろうか？この娑婆苦の充ち満ちた世界へ」（『或阿呆の一生』）。太宰治も「生まれて来てよかったと、ああ、いのちを、人間を、世の中を、よろこんでみとうございます。（中略）僕は自分がなぜ生きていなければならないのか、それが全然わからないのです」（『斜陽』）。武者小路実篤だってそうです。「人間は何の目的で生まれたのか。また何か目的があって自然は人間を生まれるようにしたのか。僕にはそれはわからない」（『人生論』）。チャーホフはこう語ります。「自分の生存の意義や目的を知ろうとしたって、なんにも教えられはし

ません。」五木寛之は、もっとはっきりと言いきります。「人生に目的はあるのか。私は、ないと思う。何十年も考えつづけてきた末に、そう思うようになった。」『人生の目的』という彼の著作の中の言葉です。もうそろそろよしたいと思いますが、あとウ(ヴ)ィトゲンシュタインとフロイトとだけ挙げておきます。ウィトゲンシュタインは「たとえ可能な科学の問いがすべて答えられたとしても、生の問題は依然としてまったく手つかずのまま残されるだろう」(『論理哲学論考』)と語ります。フロイトも「これまでに何度となく、人生の目的は何かという問いが問われてきたが、まだ満足できる回答を示した人はいない」と語って、「人生の目的は何かという問いに答えることができるのは、宗教だけなのである」(『幻想の未来／文化への不満』)と語ります。



さてヨハネ福音書はこう語りま

す。「**言の内に命(ゾーエー)があった。命は人間を照らす光であった**」(v.4)。肉体の命(生物学的・自然的生命)は他の被造物とかわらないでしょう——「**言によって成った**」のです。しかし人格的な命(ゾーエー)が「**言の内にあった**」と言われるとき、「命」の意味や目的は言にかかっています。「言」は理^{ことわり}をふくみます。その「言」のしめす「命」の理^{ことわり}が、人間の生き方を指し示す「光」なのです。「**言の内に命が**」あり「**命は人間を照らす光**」となるのです。ヨハネによる福音書8章12節で主イエスはこう言われます。「わたしは世の**光**である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、**命の光**を持つ。」「光」は世の光である主イエスに従うことによって経験する「命」(ゾーエー)から輝き出るのはです。

先ほどのアウグスティヌスはこう言いました。「**あなたは私たちを、ご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです**」(『告白』1.1.1)。神の言は今も沈黙していません。言葉は伝達の道具です。神の言は、わたしたちの心に語り

かけ、神の思いを告げ、わたしたちを招いているのです。わたしたちには憩うべきところ、帰るべきところがあるのです。

しかし5節。「**光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった**」とされています。



暗闇の対立のテーマです。ここでは光と暗闇が同時に存在していることに注意が必要です。普通は暗い部屋の灯りを点ければ、部屋全体が明るくなって、暗闇が追い払われます。ここでは、光と暗闇の二分法、光と暗闇の対立が一つのテーマになっているのです。すなわちこの光と暗闇の二分法は、同時に、命と[命の反対の]死の対立、命と死の二分法でもあるのです。それは言に命があり、命が人の光だと言われているからです。

「**理解しなかった**」(*οὐ κατέλαβεν*)という言葉は、口語訳では「勝たなかった」、新改訳では「打ち勝たなかった」と訳されています。「暗闇は光に勝たなかった(打ち勝たなかった)」と訳されます。光と暗闇の対立のテーマをより強調した、

光と暗闇の闘争のテーマになっています。もともとこの言葉(*κατα-λαμβάνω*)は「支配」を意味する〈カタ〉(*κατα*)という接頭辞と、「つかむ」という意味を持つ動詞(*λαμβάνω*)の合成語なのです。「逃がさないように捕まえる」というのが基本的な意味なのです。それを知的な文脈で使えば、「意味を逃がさないでつかむ」「把握する」「理解する」という訳が出てきます。また「自分の支配の下に捕らえる」というニュアンスを強調すれば、「勝つ」とか「打ち勝つ」という訳が出てきます。

このヨハネの文脈では、光と暗闇の対立は、生命と死の対立なのです。その意味では、「光」のことを理解できない「暗闇」が、横でボケッと立っているというニュアンスではないのです。暗闇が光を、つかみ、呑み込もうとしているが、いくらそうしても自分の支配下には押さえ込むことができないというニュアンスなのです。「**光は暗闇の中で輝いている**」とは、そのような対立と緊張を内に含む表現なのです。

光をもたないものは、命を持っていません。と同時に、彼は言ももっていないのです。言と命と光



はリレーするように、互いに連鎖しているのです。光と暗闇の二分法は命と死の二分法であり、言をもつものともたないものの二分法となるのです。そして、言をもたないものは、神をもたないのです。結局、光と暗闇の二分法は、神を信じる者と信じない者の二分法を象徴しているのです。

先ほどご紹介したマザーテレサの言葉は、思いが究極的には「運命」にまでつながるという連鎖を指していました。「初め」にあった神の「思い」は「知恵」と「言」とともに世界を創る創造行為へと行動を起こしました。しかし神の行動は、世界を創り出すこと(創造)で終わりませんでした。一つの運命につながっていくのです——唐突ですが、それは神が愛だったからです。聖書によれば、天地創造の後に、わたしたち人間の側に問題が生じました(墮罪)。そのた

めに長い歴史の果てに、ついには、この「言は(が)肉となって、わたしたちの間に宿られ」(v. 14)という展開が必要となるのです。この展開をヨハネはいろいろに表現しますが、このようにも表現します。「3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(3:16)。「言が肉となる」が「独り子をお与えになる」と表現され、神の主体的な「思い」がより鮮明になります。「愛」がその「思い」です。「愛」を動機にして、人間が「命」を得るために、神は行動を起こしたのです。先週読みましたヘブライ人への手紙をもう一度見ておきましょう。1章1-3節。

1:1 神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、1:2 この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。1:3 御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御

自分の力ある言葉によって支えて
おられますが、人々の罪を清めら
れた(=十字架の)後、天の高い所
におられる大いなる方の右の座に
お着きになりました。

さりげなく「人々の罪を清められ
た後」と書かれています。これは
十字架を指しています。人間の
救い(の問題)がこれを必要とした
からです。そのために神の思いと



知恵は、キ
リストの運
命をよしと
したので
す。神は人
間を救うた

めに生き抜かれたキリストの生涯
が、犠牲として十字架に献げられ
ていく、というその運命をよしと
されたのです。この「キリストの
運命」は、逆に、「キリストの運
命」をそのような運命にしてしま
った人間の愚かさ、人間の罪深さ
を照らし出します。十字架、しか
しこれこそが、神の知恵であった、
とパウロは語ります。そしてキリ
ストの十字架が、神の深い「思い」
のうちに隠されてあった、とパウ
ロは語ります。コリントの信徒へ
の手紙—2章6—9節

2:6 しかし、わたしたちは、信仰
に成熟した人たちの間では知恵を
語ります。それはこの世の知恵で
はなく、また、この世の滅びゆく
支配者たちの知恵でもありませ
ん。2:7 わたしたちが語るのは、
隠されていた、神秘としての神の
知恵であり、神がわたしたちに栄
光を与えるために、**世界の始まる
前から定めておられたものです。**

2:8 この世の支配者たちはだれ一
人、この知恵を理解しませんでした。
もし理解していたら、栄光の
主を十字架につけはしなかったで
しょう。2:9 しかし、このことは、
／「目が見もせず、耳が聞きもせ
ず、／人の心に思い浮かびもしな
かったことを、／神は御自分を愛
する者たちに準備された」と書い
てあるとおりです。

同じく、コリントの信徒への手紙
—1章18—21節。

1:18 十字架の言葉は、滅んでい
く者にとっては愚
かなものですが、
わたしたち救われ
る者には神の力で
す。1:19 それは、
こう書いてあるか
らです。「わたし

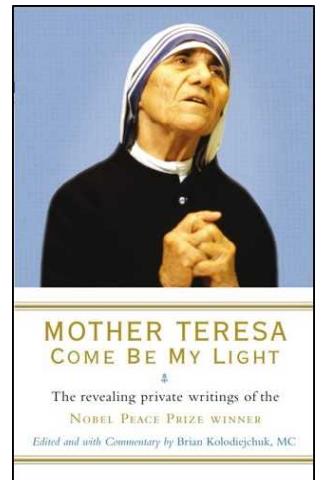


は知恵ある者の知恵を滅ぼし、／
賢い者の賢さを意味のないものに
する。」1:20 知恵のある人はどこ
にいる。学者はどこにいる。この
世の論客はどこにいる。神は世の
知恵を愚かなものにされたではな
いか。1:21 世は自分の知恵で神
を知ることができませんでした。
それは神の知恵にかなっていま
す。そこで神は、宣教という愚か
な手段によって信じる者を救おう
と、お考えになったのです。

人は、神の言によって創られた自
然や被造物に書き込まれている小
文字の言葉 **verbum** を通して、大
文字の言葉 **Verbum** である神を知
る(アウグスティヌス)ことができ
ませんでした。神の言が人となっ
たのは、つまりキリストがこの世
界に誕生したのは、人間が、その
知恵によって、神を知ることがで
きなかつたからです。つまり人間
の知恵が——真実を知る能力を持
たない——要するに愚かだったの
です。この人間の知恵は、キリス
トを伝える「宣教」を「愚か」な
行為と見なされざるを得ないので
す。宣教とは、当時の知者たちの
最終結論として下された犯罪者と
しての愚かなキリストの生涯を、

後生大事に伝えることだからで
す。しかしこの世の計算では愚か
にしか見えないキリストの生涯は
「**宣教という愚かな手段**」を通し
て、この世の知恵の愚かさを暴き
つつ、その暗闇を背景に、神の知恵
として、世の光として輝くのです。

マザーテレサの死後、彼女の私
的な手紙を集めた『来て、わたし
の光になりなさい』(マザーテレ
サ[著], ブライアン・コロディエチ
ュック [編集], 里見貞代[翻訳],
女子パウロ会, 2014年. 原著 Mother



Teresa, Brian Kolodiejchuk, Mother
Teresa: Come Be My Light: The
revealing private writings of the Nobel
Peace Prize winner; Rider, 2008/8/7.)
という本が出版されました。彼女
の手紙には、彼女が抱えた心の「暗
闇」についての言及が多く見られ
ます。例えば「**この恐ろしい喪失
感、未知の暗闇、神に対する絶え
間ない欲求などがわたくしの心の
奥深くに痛みを与えています**」(邦
訳P.12)。聖人マザーテレサの心
に「暗闇」が、というのでマザー

批判のネタ本にされる本です。マザーテレサはカトリックの修道女として、「神の愛の宣教会」を立ち上げてからも、他の聖職者と同じように、数人の霊的指導者の下で指導を受けています。聖職者は日々の黙想や懺悔、あるいはリトリート（長期の黙想期間）を通して、霊的な訓練を繰り返します。今ご紹介しましたマザーの言葉は、そのような黙想の中で、神とまた自分自身と向き合う中から出てきた言葉です。またこのようにも書いています。「**シスターたちを指導する時、わたくしは時々強い声で激しい語調でした。人々に対しても数回かんしゃくを起こしました**」（邦訳P.274）。このような懺悔の言葉も、マザーをどうしても批判したい人たちには「聖人のイメージから



らは想像もできないヒステリックな姿を、マザーテレサ本人が自ら明かして、ざんげしているのです」となるのです。批判者

は「さらに、修道女であるはずの彼女は驚くべき事も書いていた」と続けて、マザーの言葉を引用し

ます。「**わたくしが感じるのは、神がわたくしを望まれないことです。神は不在です。……神はわたくしを望まれない**」（邦訳p.12-13）。

マザーの批判者は、これが「常に『聖人』を演じ続けてきたマザー・テレサの本当の顔である」とか、これは「信仰の放棄ともとれる」と評します。神と向き合うこと、自分と向き合うことを真剣に行わない人には、これらの懺悔の言葉の深みが分かりようもないのです。自らの心の闇、神の不在の感覚に、声にならない叫びを上げずにはいられなかった彼女は、ついに黙想の中で主イエスの声を聞くのです「**来て、わたしの光になりなさい。**」暗闇を通過して黙想と懺悔から立ち上がった彼女は、こう語ります。「**わたくしの決心。**

第1は主イエスに従うこと。その謙虚さにおいてもっと近づくことができるように。修道女たちには、優しく、きわめて優しく、しかし従順においては毅然として。貧しい人たちに対しては、寛大で配慮深く。病いの人たちに対しては、優しさを極めること。そして第2の決心は、神に微笑みかけること」（Kindle版 p.166、挽地訳）。

マザーテレサの葬儀の際にカルカタの人々が掲げた無数の旗の一本にこう書いてあったそうです。「マザー、あなたはこの暗闇の世界の光の源でした。」人が神の前に生きようとするとき、自らの心の闇、人生の闇に直面することになります。しかしそこを通して、光は暗闇の中に輝き始めるのです。

冒頭に申しましたように、クリスマスが近づくと、街の中はイルミネーションで、光の街となります。そもそも、普段から夜は明るくなり、闇は蔭が薄くなってしまいました。しかし、その光はしょせん人工の光に過ぎず、朝日とともに、その光はみすばらしいものになってしまいます。わたしたちは今、現代をおおっている暗闇を、またわたしたちの心の暗闇を、人工的な光でごまかすのではなく、しっかりと見据えたいと思います。そのことによって、ほんとうの光の輝きを実感できるのです。

最後に、エフェソの信徒への手紙 5 章 8 節を読んで終わりたいと思います。

5:8 あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光

となっています。光の子として歩みなさい。

祈りましょう。

2018.12.9. 日本基督教団千歳丘教会



1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は、初めに神と共にあった。

1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

1:15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。

「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

1:16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。

1:17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

1:18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

1:1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.

1:2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πρὸς τὸν θεόν.

1·3 πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ἓν. ὃ γέγονεν

1·4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, καὶ ἡ ζωὴ ἦν τὸ φῶς τῶν ἀνθρώπων·

1·5 καὶ τὸ φῶς ἐν τῇ σκοτίᾳ φαίνει, καὶ ἡ σκοτία αὐτὸ οὐ κατέλαβεν.

1·6 Ἐγένετο ἄνθρωπος ἀπεσταλμένος παρὰ θεοῦ, ὄνομα αὐτῷ Ἰωάννης·

1·7 οὗτος ἦλθεν εἰς μαρτυρίαν, ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός, ἵνα πάντες πιστεύσωσιν δι' αὐτοῦ.

1·8 οὐκ ἦν ἐκεῖνος τὸ φῶς, ἀλλ' ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός.

1·9 Ἦν τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ φωτίζει πάντα ἄνθρωπον, ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον.

1·10 ἐν τῷ κόσμῳ ἦν, καὶ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ ὁ κόσμος αὐτὸν οὐκ ἔγνω.

1·11 εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, καὶ οἱ ἴδιοι αὐτὸν οὐ παρέλαβον.

1·12 ὅσοι δὲ ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ,

1·13 οἳ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ θελήματος ἀνδρὸς ἀλλ' ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

1·14 Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ

ἐσκήνωσεν ἐν ἡμῖν, καὶ ἐθεασάμεθα τὴν δόξαν αὐτοῦ, δόξαν ὡς μονογενοῦς παρὰ πατρός, πλήρης χάριτος καὶ ἀληθείας.

1·15 Ἰωάννης μαρτυρεῖ περὶ αὐτοῦ καὶ κέκραγεν λέγων, Οὗτος ἦν ὃν εἶπον, Ὁ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἔμπροσθέν μου γέγονεν, ὅτι πρῶτός μου ἦν.

1·16 ὅτι ἐκ τοῦ πληρώματος αὐτοῦ ἡμεῖς πάντες ἐλάβομεν καὶ χάριν ἀντὶ χάριτος·

1·17 ὅτι ὁ νόμος διὰ Μωϋσέως ἐδόθη, ἡ χάρις καὶ ἡ ἀλήθεια διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἐγένετο.

1·18 θεὸν οὐδεὶς ἑώρακεν πώποτε· μονογενὴς θεὸς ὁ ὢν εἰς τὸν κόλπον τοῦ πατρὸς ἐκεῖνος ἐξηγήσατο.